思いやりの心を持つ大切さ

最近、インターネットなど、バーチャルな世界を経験する機会が増えてきているように感じます。また、コミュニケーションツールもLINEやFacebookなど、技術革新により大きく変化してきています。このような時代だからこそ、人に対する思いやりの心を育むことが、より一層重要になっていると思います。では、「思いやり」とは一体何でしょうか？　「思いやり」とは、まずは、相手の人を気にかける、関心を持つところから第一歩がはじまります。そして、次に相手の心（感情・望み・考え）を察する、想像する、相手のためを考える、相手の幸福を考える。そのようなことが、思いやりの土台になると思います。第二のステップは、人にやさしくする、人のためになることをする。人のためになることをするというと、大変なことのように聞こえますが、ちょっとした一言、ちょっとした行動や親切が、相手にとっては、自分の考えている以上に喜びにもなり、また時として嫌な思いをさせることがありますよね。では、最後に「思いやり」を実践するためにどうすれば良いのでしょうか？　まずは小さな親切からはじめること。そして、相手が親切に、「ありがとう」を言葉で伝えること。そうすることにより、お互いの思いやりの心を育むことができるようになります。「ありがとう」と言われて、嫌な気持ちになる人はそんなにいないと思います。毎日「ありがとう」を伝えることを習慣化することが大切だと思います。相手の喜びを自分の喜びと感じることのできる心の習慣が、周りの人を幸せにし、最終的には自分自身を幸せにすることではないでしょうか？

つべこべ言わず、Ｄｏ！ａｃｔｉｏｎ

「Ｄｏ！ａｃｔｉｏｎ」、「つべこべ言わず、やってみる」

ここしばらく心に残って気に入っている言葉です。前者は、徳島県出身で女性初のジェトロ理事に就任されている浜野京氏の、ご自身のセミナーでの言葉で、後者は、島耕作シリーズで有名な漫画家、弘兼憲史氏の新聞インタビュー記事での言葉です。

お二人とも徳島に縁のある方だということもあり、注目して得たフレーズですが、どちらもバックグラウンドにある人生の重みが感じられ、見聞きしたときは「なるほど！」と心に響きました。

要は、行動を起こすことの大切さやチャレンジ精神、また、成功するための段取り力やタイムマネジメントの大切さを説いているものなのですが、日々の仕事や生活の忙しさに追われ、そういったことが疎かになっているのかも…と自分と照らし合わせてふりかえるきっかけにもなりました。実践はなかなか難易度の高いことですが、気持ちだけでも前向きに持ちたいですし、子供にも良い言葉、習慣が少しでも伝われればいいなと思います。

さて、ちょっと引っ込み思案（だと親は思っています）な息子の、最新のチャレンジはマラソン大会参加でした。父親に引っ張られながらの初、親子マラソンでしたが、「無理ー！」と言いつつもなんとか完走し、おまけに入賞の賞状までいただけて嬉しかったようで、本人にも家族にも頑張る姿は実りあるものでした。

かく言う母には、ご披露できるエピソードがなく申し訳ないですが、親も子も共に、「つべこべ言わず、Ｄｏ！ａｃｔｉｏｎ」の精神で、日々、前向きに成長していければ、と思っております。

笑い合える時間を

娘を学校へ送っていく車の中、本当にどうでもいいことに二人で大笑いをした。お腹を抱え、涙目になりながらケラケラ笑った。目が合うと、なおさら笑いが込み上げてきた。互いの気持ちが通じ合っているようで、とても幸せに感じた。そのとき、

「久しぶりにこんなに笑ったね。」

と言った娘の言葉にはっとした。

仕事をしているため、娘と過ごす時間が多いとは言えない。そんな中、娘を学校へ送っていく時間は、唯一二人で過ごす大切な時間である。その唯一の時に、私は娘とどのような会話をしてきたのだろう。「課題はできている?」「忘れ物はない?」「先生の話をよく聞いている?」口にするのは、やるべきことが出来たかどうかの確認ばかり。娘は、「出来ているよ。」と素っ気無く答えるだけ。その表情からは、心のあり様は図れず、まるで私の思いだけが一方的に娘を通過していくようだ。これが会話と言えるだろうか。仕事に追われ、時間に追われる日々、その中に娘を巻き込み急かすことはしても、娘に合わせていくことなどなかなか出来ないことに気が付く。

これからも仕事や時間に追われる日々は続くだろう。だからこそ、娘と過ごす唯一の時間を笑い合える幸せな時間にしたいと願う。涙が出るほど二人で笑い合ったあの時、幸せを感じたのは確かである。心が弾み、会話も弾んだ。何より娘の表情は生き生きとしていた。お笑い番組のことでも本の一場面のことでもいい、娘ととことん笑い合える時間を築くことが、今の私の課題となった。

息子の心変わり

小学校の夏休みといえば、父と昆虫採集をしに県南の森まで出かけたことを思い出す。父の友人が標本作りを趣味にしており、カブト虫やクワガタ虫、カミキリ虫などを木箱に整然と並べて持ち帰らせてくれた。おかげで昆虫類には抵抗なく育つことができた。当然、我が息子にも同じように育って欲しいと願い、小さな頃から庭先や公園など、散歩の折に興味が沸くよう声かけをしてきたつもりだが、当の本人はどうも反応が悪い。むしろ触るのを嫌がり、飛んでくる小バエでさえ怖がるようになってしまった。

「残念ながら、『街の子』に育ってしまったか…。』

私の育った当時とは異なり、近所でも空き地が減り、アスファルトや街路樹に囲まれて育った息子にとっては、当然の成り行きかもしれないと、あきらめかけていた。

ところが、小学校に入学してからというもの、驚異の『友達パワー』のおかげで、息子の昆虫嫌いは解消されることとなった。生活科で自然と触れ合う課題が出されるや否や、自ら郊外の妻の実家へ出向き、バッタ、カマキリ、セミを追いかける日々。

「今度、学校にトノサマバッタを持っていく約束したんよ!」

虫かご、虫捕り網も新調して、意気揚々と外出するようになった。一年生はセミ捕り、二年生ではバッタ捕りに没頭し、課題の絵画や作文の題材もそれらで済ませてしまった。

家庭だけでは成り立たない、息子の動機付け。これからも、息子は集団生活で様々な刺激を受けて帰ってくるだろう。芽生えた興味を親子で大切に育て、可能性を広げていけたらいいと思う。

大切な六年間

我が家には四つ年の離れた二人の娘がいます。下の娘が小学校に入学してから二年間、いつも連れ立って登校していましたが、昨年の春に上の娘が卒業し、二人別々の朝が始まりました。

家を出て十分足らずの場所にあるバス停まで歩き、そこからバスに乗って学校へと向かいます。一人で通うようになった初日より、変わった様子もなく元気に登校していた下の娘が、二学期に入ってしばらくした頃に、突然、

「怖い夢を見たからバス停まで送って欲しい…。」

と言い出しました。朝の忙しい時間、正直面倒だなと思いつつも、以来、手をつないでバス停まで一緒に歩く朝が続いています。

一方、中学校に進学した上の娘は、沢山の荷物と共に自転車で家を出発します。朝、一度家を出ると部活を終えて帰宅するのは、もう暗くなった夕飯時。帰宅してからも、自分の計画のままに一日を過ごす姿を見ていると、ついこの間まで手のかかる小学生だったことが嘘のようです。

娘たちの成長は、早くもあり遅くもあり。日々の中で見せる表情も、時には頼もしかったり時には頼りなかったり。しかし、上の娘もこれまでを振り返る時、たくさんの友人や先生方に恵まれた小学校生活の中で、共に積み重ねてきた様々な経験が、現在の娘の自立を助けているのだなと強く感じています。

これから先の自立へと繋がる大切な六年間。残す三年間、バス停まで通い詰めたくはないけれど、いつもそばにいて見守っていけたらと思っています。

息子の成長

「もう一年半になるのかぁ。早いなぁ。」

息子は二年生の二学期に、公立小学校から私立の文理小学校に転入した。あれから、一年半。あっという間に月日が経ち、振り返ってみると息子自身、本当によく頑張ったなぁと思う。公立の時と、突然環境ががらっと変わり、友だちも一からスタート。学習のペースや学習量、それにプラス読書、作文、日記など親である私でも驚き、混乱した。

そんな中、息子は一生懸命その波に乗ろうと頑張る姿を私に見せてくれた。ありがたいことに、新しい友だちの名前も日に日に聞くようになり、とうとう、

「ママ!! 学校楽しい!! 転校して良かった!!」

という言葉が息子の口から出た時には、涙が出るほど嬉しくてたまらなかった。そして、とても安心した。

転校してからは、あいさつをする、毎日読書をする、しっかり先生の話を聞き学習するなどのあたり前にも思えるような習慣が確実に身についた。ついこの間までできなかったことが、できるようになって、それを嬉しそうに笑顔で報告してくる息子。そんな積み重ねの機会を多く提供してくれる環境に、感謝しなければいけないなぁと思った。息子が一つ成長すると、私自身も一つ親として成長できたような気がした。

息子がこれからどう成長していくのか楽しみだ。今の素晴らしい環境の中で自分の可能性にチャレンジし、自分の長所を活かしていってほしい。そして、それをずっと見守り続けたいと思う。

足が自由でなくなった日々の中から

春休み、自身の不注意により、靱帯二本切断半月板損傷で、車椅子生活を送ることになりました。旅行中の事故で、ホテルでは特別に部屋食にして下さったり、帰路の飛行機でも最優先搭乗と何もかも至れり尽くせりの対応をして頂きました。文理小学校の参観日もエレベーターに乗り、楽々子供の教室に移動できたり、大塚美術館や市役所等に行った折も、係りの方の誘導により車椅子で何の不自由を感じることなく動くことが可能だったのです。

日本の国は、なんと障害者に優しい国であったのかと再認識させられたのです。公共的施設の構造上では、エレベーターやスロープの整備、トイレや様々な所に障害を持つ人が社会と共生できるようにと、優しい思いやりが至る所に見えて参りました。

車椅子の生活で気づいたことに、子供の目線で見ると迷子になってもなかなか見つけられない発見、買い物中商品棚を下から見上げる不便さを感じたりしました。また、障害者優先駐車場では、健常者の人が平気で車を止める姿も目につきました。確かに優先であり、専用とはないのですが、勝手で自己中心的な人の多さに憤慨し怒りさえ覚えたのです。皆さんは、どう考えますか。

愚息も車椅子を率先して押してくれたり、犬の散歩に洗濯の出し入れ、彼が手伝える範疇で母を助けてくれ、頼もしく育ったではないかと思えたりもしました。私の障害は、一時のもので今は二足歩行可能となり、おこがましいのですが、障害を一生背負って生きなければならない方は、本当に大変だと実感できました。世のエゴイスト達に負けず強く逞しく生きて欲しいと切に願います。

ささやかなたのしみ

毎朝、娘と二人で出掛けます。小学校で娘を降ろし、私はそのまま仕事に向かいます。起きてから出掛けるまでの時間をどんなに慌ただしく過ごしても、車に乗ってしまえば落ち着きを取り戻すひとときがあり、私はこの時間をたのしみにしているのです。

小四の娘は三人きょうだいのまん中なので、家の中では、甘えたい時も、叱られる時も、母親を独占することはできません。でも、朝の車中では誰にも邪魔されずに母娘のおしゃべりができます。子どもが母を独り占めにしたいと思う時期なんてあっという間に過ぎ去ってしまうので、私もこの機会を大切にしています。

ある日のこと、信号待ちをしていると大きな犬が車の前を走っていきました。それを見た娘が真面目に話しかけてきました。

「ママ、あの犬、走り過ぎたら、足がすりへってしまうなあ。」
「えっ?! そんなことないよ。それ、お友達から教わったん?」
「違うよ。学校にある分厚い本に書いてあったんよ。猟犬が獲物を追って走り続けたら、ダックスフンドになったんやって。」
「そんなことあるかなあ。それ、何の本で見たの? 犬の本?」
「『ほら男爵』。ママもダックスフンド見たことあるだろ?」
「ダックスフンドは見たことあるけど…。そのお話はほらだよ。」
「え? ほらって何? 男爵の名前と違うん? どういう意味??」

ほら話をすぐ真に受ける娘は、今が一番、子どもらしい時。学校であったことを元気に話す様子が私の目にはとても可愛らしく映ります。これからは、娘の成長とともに会話の趣が変化していくこともたのしみたいと思っています。

子どものそばによりそって

「あなたが生きているだけでいい。」という気持ちをいつも持って子どもと接していますか。という話を読んだ。親の期待が強くなりすぎてプレッシャーをかけるのではなく、子どもには無条件の愛・無償の愛情を注いでほしいという内容だった。子どもへの接し方として本当にその通りだと納得し、相手のよいところを見つけ口に出して具体的にほめるようにしている。しかし、わが子を見ていると…なかなか菩薩のようにはいかないものである。

私は体を動かすことが大好きであった。思いきり自分の体を動かし、汗を流す。そして仲間と共に一つの目標に向かっていくその過程も楽しかった。子どもにもその楽しさを味わわせたかった。

体力は心の力につながり、運動は脳を活性化し学力にもつながると考えている。勉強や運動、また様々なことを自分で考え、決めたことを投げださずにやり抜く力こそ子どもたちにつけてほしい力だと思うのである。幸いにもわが子は水泳という好きなことを見つけ、学年や性別を問わず、いろいろな学校の友だちともうまく付き合っているようである。親としては、見守るしかできないが、いつも一生懸命に練習する姿や、レースで良い結果がでたときには喜び、失敗したときには悔し涙を見せる姿、その悔しさをばねに次のレースに向かっていく強さも身に付けたその姿に彼の成長を感じる。レース前の緊張感、レース中の頑張れとしか言えないもどかしさなど、その瞬間、瞬間を彼と一緒に過ごせることに感謝し「あなたが生きて元気でいるだけでいい。」と心底思えるのである。ずっと「応援団長だからね。」と。

親子の会話

我が家に待望の息子が誕生してから、早いもので十一年の年月が流れた。

日々の子育ての中で、精一杯の愛情を注ぐことはもちろんだが、声かけ、親子の会話を大切にしながら過ごしてきたつもりだ。

そのかいあって、息子は毎日の出来事や、自分が感じたことなどを、細かく話す子に成長した。

嬉しかったこと、楽しかったことを、目をキラキラさせながら話す様子を見ていると、こちらまで幸せな気持ちになる。

時には、

「ぼくは〇〇と思うけど、どうしたらいい？」

と、悩みの相談を持ちかけてくることもあるが、そんな時は、夫と共にアドバイスしたり、本人に色々と考えさせたりして、解決に導くように努力している。

また、息子との会話の中で、いつの間に、こんなにしっかりとした考え方が出来るようになったのか！と驚かされ、親の私達の方が、息子から学ぶことも多く、成長を感じる。

親は子供と向き合って、話を良く聞き、子供にも、折にふれて親の気持ちを伝えていくことで、親子の信頼関係が深まるのではないかと思う。その気持ちが心の中にある限り、決して道を誤ることなく、人生を歩んでくれると私は信じている。

成長と共に、親よりも友達に話す機会が増えていくのかな？と思うと寂しい気もするが、それだけ信頼出来る友達に恵まれたことを有難く思い、これからも息子の成長を見守っていきたい。

大切な小学校時代

「いってきます。」私を待たずに玄関を飛び出していく。大きくなった娘を送り出す時、一年生の頃は、「いってらっしゃい。気を付けてね。」と言うまで玄関で待っていた頃がとても懐かしい。時間割の確認や鉛筆を削るのも見ていてと言っていたのに、今では「勝手に見んといて。」と言われる始末。母の出番も随分少なくなった。しかし、こうやって自分自身も成長してきたように思う。

子供の頃の記憶で一番よく覚えているのは、小学校時代。友達と喋ったこと、先生に言われたこと、まるで昨日のことのようにはっきりと覚えている。それくらい私達の成長する過程で一番重要な時代であったに違いない。この小学校時代に性格や癖、思いやり、助けあう心、挨拶など社会人となっても一番大切なルールを教わり、人間形成がされていった。そして、この一番重要な小学校時代をブレることなく、素直に育ってくれた娘。これは、良き師、良き友、良い環境に恵まれた証拠だと確信している。

娘も社会へ出た時、きっと気付くはずである。社会人としての大切なルールを学んだのは、小学校時代であったこと。当たり前にしている挨拶や思いやり、助け合うこと。これは、出来そうで出来ることではない。いかに人間形成がなされる時をどう過ごしたかにより決まる。本当に、素晴らしい時間をこの文理小学校で過ごせたことを改めて、感謝し、誇りに思うことだろう。

これから先、壁にぶつかり悩んだ時、この楽しかった時代を思い出してほしい。きっと元気になれるから。そして「正しく　強く　美しく」成長してほしい。

「積み立て」と「引き出し」

過日、サッカーのW杯に関する番組の中で、岡崎選手の母、富美子さんが、とても興味深いお話をされていました。テニスコーチでもある富美子さんは、テニスを岡崎選手の兄に教える時に、自分ができるのだからできて当然と、厳しく押しつけた教育をしてしまっていたそうです。そのことが子供の負担になっていることに気付き、子供のできない所を見つけて指導する方法を改め、できるだけ関わらずに見守ることの大切さを悟られたようです。以来、「練習しなさい。」という変わりに、「積み立てておこうね。」と言い、「ガンバレ！」という変わりに、「引き出しておいで。」という応援をされたそうです。

娘は三才の時、私達はそれから数年遅れて、社交ダンスを夫婦で始めました。ダンスにおいては、娘の方が先輩です。私達夫婦は、人生を長く経験していますが、頑張ってもできないことがあることを、身をもって知りました。子供たちが簡単に覚えるステップも覚えられず、クルリと回転するつもりが、ズデンドテンと恥ずかしい限りです。おまけに目まいが…。そんな両親を、娘は、「ドンマイ。頑張ればきっとできるよ。」と、励ましてくれます。

娘に期待ばかりして、結果にこだわり、伸びようとする芽を押さえていることの多い日常。子供達が自分で積み立てた真の知恵を、スムーズに引き出すことができるように、温かく見守っていこうと、この言葉を通じて省み、学びました。

最後に、四年生から転校して参りましてから、温かく受け入れて頂き、素晴らしい環境で学ばせて頂き、心より感謝致します。